

## 風景論の移譲

志賀重昂と文学青年

木村洋

### 1 はじめに

一八八〇年代の文学史は政治小説の流行によって特徴づけられる。ここで政論家や政治家が小説創作を通じて自己の政治的主張を宣伝した。しかし他方で、一八八〇年代後半から新たな硬派言論人が現れ、政治小説の執筆とは異なる形で同時代の文学に関与していく。

そのような硬派言論人の代表が徳富蘇峰だった。この発言の特色は、政治熱や愛国心に満たされた政治小説流の功利主義にいつそう染まらない形で文学を擁護する態度にあった。現に蘇峰の初の文学評論「近来流行の政治小説を評す」(『国民之友』一八八七年七月、無署名)〔1〕は、政治小説流の功利主義を批判

するために書かれる。さらにその後次々と発表された、詩的な修辭と宗教的な感慨に満たされた蘇峰の記事群は知識層の青年に大きな反響を生み出す。

ただし蘇峰だけではない。この時期、蘇峰によく似た硬派言論人として繰り返し触れられたのが志賀重昂だった。蘇峰と志賀の業績がある協力関係にあったことは、宮崎湖処子『国民之友及日本人』(集成社、一八八八年一二月、署名末兼八百吉)から分かる。

湖処子はここで『国民之友』(一八八七年創刊)以前の思想界の貧しさを強調する。「維新の後(略)世人の目か政治、法律、理化学等、実学と呼做す者のみ凝固まり、官途の月給と理窟議論にのみ忙ハしかりし間に(勢の自然なりしも)文学美術

の思想ハ未だ遠方より来らず。むろん「議論の人形芝居」(松屋主人「小説を書かずして手紙を書可し」『読売新聞』一八八七年一月二三日)と言われた政治小説もこの「理窟議論」に満ちた動向の一部分と言える。そして『国民之友』によって「美わしき文学発生の時代とハなりぬ」と湖処子は説き、こう述べる。「予輩ハ又国民之友が文学興復の主唱者たる名誉を帯びて、第二十号の暁に達したる時に、早くも日本人なる雑誌か、(略)志賀重昂氏の筆を仮来りて、国民之友と文学上の競争を試みんとするか如きを認めたり」(二三〜六頁)。

このように志賀は詩的な感慨に満たされた著作や時文を通じて、蘇峰とともに「文学興復」の推進者として活躍した。つまり一八八〇年代後半からこの二人の硬派言論人は、青年層における文学熱の生成装置として思想界の更新に寄与し続けた。本論はこの志賀の働きを考える。特に志賀の著作が後統の文学者に新たな表現活動を誘発していく展開に目を向ける。従来の研究でこの展開は十分に注目されていないが、この検討を通じて文学史における志賀の試みの獨創性はより鮮明になると思われる<sup>2)</sup>。さらにこの作業は、一八九〇年代の表現と思想の発展形態のいっそうの明確化にも繋がるはずである。

## 2 風景論の始まり

国木田独歩は「民友記者徳富猪一郎氏」(『青年文学』一八九二年一〇月、署名鉄斧生)で、志賀の特色が「地理数奇」にあると述べている(五頁)。この「地理数奇」の著作業の最も目覚しい成果として現れたのが『日本風景論』(政教社、一八九四年一〇月)だった。では『日本風景論』はどのような新しさと魅力を備えているのか。

『日本風景論』の新しさはまず題名に表れている。「風景」に「論」という言葉が連なるこの佇まいがすでに新奇なものに映ったらしい。ある記事は、「何ぞ其名の優美にして風韻に富めるや」という感想を漏らし(『秋田日日新聞』一八九四年一月一四日)、別の記事は「風景論なる柔さしき称目の許に於て」云々と述べた(『愛媛新聞』一八九四年一月一五日<sup>3)</sup>)。

この特徴的な題名は、ただ風景を眺め、紹介するだけではなく、その眺め方、観察の作法そのものを自覚的に再吟味し(「論」じ)ようとする態度と無縁ではありえない。よく参照される小島烏水(『岩波文庫初版』解説)(志賀『日本風景論』岩波文庫、一九九五年九月、初出一九三七年一月)をあらためて確認しよう。『風景論』が出てから、従来の近江八景式や、日本三景式の如き、古典的風景美は、殆ど一蹴された観がある。

(略) 風景の観方、描き方までが教えられ、日本人自らの風景観も変革せざるを得なかった」(三七一―三七二頁)。

『日本風景論』では特定の日本の風景が教えられただけではない。「風景の観方、描き方」までが教えられ、「日本人自らの風景観」が「変革」されたと読者は感じた。言い換えれば、ここで既存の美意識に代わる、より魅力的な美意識と出会い、眺め方そのものを反省する機会が設けられる。

その方針はどのような叙述に表れているのか。例えば『日本風景論』はあるところで「一千四百余の彩色を所有して宇内第一と誇揚せる独逸の一染工場主」と「二千の彩色を所有せる日本京都の川島氏」を並べることで、日本と欧米における色彩感覚の違いを際立たせてみせる(三六―三七頁)。さらに『日本風景論』はこう主張する。

「天桃白李、嫩緑軟紅、佳は即ち佳、何々の三景、何々の八景、愛すべきは則ち愛すべし、而かも是れ未だ諸君子が满腔の心血を濺ぐに足らざるもの、諸君子が满腔の心血を濺ぐに足るは、彼の水蒸氣に在り、活火山、熄火山、火山岩に在り、流水の激烈なる浸蝕にあり」(二八六頁)。

ここで日本三景、近江八景という過去の認識枠組みと、西洋の学問に裏打ちされた「水蒸氣」「活火山」などに立脚する自己の認識枠組みが並べられ、後者の優越が説かれる。ここから

分かるように『日本風景論』で行われるのは、単に風景の紹介という名所図会風の作業ではない。『日本風景論』は新旧、東西の風景の見方ないし美意識の併置、照合の操作を通じて、風景の眺め方そのものへの反省を読者に促す。このように風景だけではなく、風景の見方つまり美意識までも見渡していくという、名所図会のような言説よりも一段階上位の目(解析)の作動にこそ、『日本風景論』の特色があった。

そうした異なる風景の観方や美意識を縦横に見渡し、併置、照合する叙述の運動が新たな詩的感興の源泉にもなる。例えば「(二)日本には水蒸氣の多量なる事」の章の冒頭近くにこう記されている。

「是を以て朝暾僅かに昇るや、光線はこの水蒸氣の分子を透して来り、紅靄濃淡、曙色特に一層の趣を加ふ、而して夕陽西山に昏かんとするや、余照は暮雲に掩映して五彩色をなし、残煙は沈まんとして尚ほ樹梢に棲む、(略)その陽春三月、百花乱発するの候に到れば、這般の水蒸氣は霞となり、小夜ふかくかすみの網に在る月を」 正徹

ひくやみなどの蟬のよひこえ

霞の網や、蟬人喚声の分明なるや、その水蒸氣の多量なること測り知るべきのみ」(二二―二三頁)。

ここで同じ日本の景物は、「かすみ」云々という一六世紀日

本の和歌の表現と、「水蒸気の分子」という西洋の学問に支えられた漢文脈の表現の二通りの方法で捉えられる。つまり読者は双方の表現の詩的感興とともに、そうした異なる文脈に属する表現の隣接ゆえに、双方が互いの個性を競合し合う光景から詩的感興を感じとる。同時にこの部分は、「かすみ」云々という和文脈の表現が、「水蒸気」云々という最新の科学的表現に変換される過程を描いたものと言える。つまり新旧の眺め方、表現方法の交代劇の現場に立ち会う感興もここに生じている。こうした感興を支えるのが、古今東西の風景の見方を横断的に見渡し、併置、照合する叙述の運動なのである。

そうした叙述態度に『日本風景論』の際立った特色があったことは、矢津昌永『日本地文学』（丸善商社書店、一八八九年三月）との比較によって明らかにされる。『日本地文学』は「我」国に関する「地文学」の書がないという状況の中で現れ（無署名「日本地文学」『日本』一八八九年四月四日）、「従来絶て見ざる処の良書」と称えられた（無署名「日本地文学」『読売新聞』一八八九年三月二二日）。「水蒸気」「流水ノ作用」「火山」を詳述する点でも『日本風景論』の内容と似ている。

しかし『日本地文学』は、風景の眺め方や記述方法そのものを再帰的に問い直す態度を欠いている。例えば「水蒸気」を取り上げる際にも、「気圧ノ強弱ハ又空氣ニ含有スル水蒸氣ノ多

寡ニ依リテ変化スルモノナリ」といった啓蒙的な解説に終始する（一八八九年五月刊の訂正再版、三八頁）。そのことが、「水蒸気」と「かすみ」という互いに文化的背景を異にする言葉と対照させつつ、風景の眺め方そのものへの反省を促す『日本風景論』といかに違っていているかは明らかだろう。『日本風景論』の読者が「風景の観方、描き方までが教えられ」と語ったのはそのような『日本風景論』の配慮のためだったはずである。

以上の検討から浮かび上がってくるのは、美意識（風景の見方）の可変性への自覚である。つまりどの美意識も絶対的で固定的ではなく、時代や場所が違えば、その美意識も違ってくることが強く意識されている。こうした美意識の可変性への自覚は、当然ながら、新たな美意識の制作への欲求にも容易に結びつく。

現に志賀はあるところで、「所謂日本の国粹ハ、美術的の觀念に存在す」と述べた上で、「這般の觀念は藤原氏執権の当代に軟弱となり、戦国の時期に退歩し、徳川氏の治世三百年の間に変則的の發達を作為した」という変遷を辿り、「何んぞ這般〔美術的の觀念〕を正則的に發達せしむるの希望なしとせんや」と説いた（「大和民族の潜勢力」『日本人』一八八八年七月三日、三頁）。この言明が示すように、志賀において美意識（美術的の觀念）は人為的な操作（發達）の対象として理解されて

いる。

志賀がどれほど美意識という論点に拘りを見せていたかは、「如何ニシテ日本国ヲ日本国タラシム可キヤ」(『国民之友』一八八七年一月二一日)から分かる。ここで志賀は、「今日ハ勸農及ビ商業拡張ノ議論ヲ暫ク止メ、他ニ日本ノ国基ヲ鞏固スルノ方策ヲ論」じると断った上で、「日本ノ山水風土花鳥ノ優美ナルヲ歎賞スルノ感情ヲ層一層涵養」することの意義を説く(一六頁)。「日本ノ国基」を論じる文脈で、政治上の話題(勸農及ビ商業拡張)ではなく、美意識(「優美ナルヲ歎賞スルノ感情」)を第一義的な論点として前景化させるこの特異なふるまいに、「文学興復」(宮崎湖処子)の推進者としての志賀の個性がよく表れている<sup>74)</sup>。

その意識の延長上に生まれたのが『日本風景論』だった。つまり『日本風景論』は、どのように日本人の美意識を制作し直すかという、これまで抱き続けてきた思想課題への志賀なりの回答なのである。次に志賀による新たな美意識の提案を見ていこう。

### 3 美意識の動員

志賀重昂『日本風景論』における新たな美意識の制作への意

欲は、特に松を称賛する記述によく表れている。

「日本人間ニ桜花を以て其の性情を代表せしむ、桜花美亦佳、其の早く散る所是れ惜まるゝ所なるも、(略)風に抗す能はず雨に耐え得ず、狼籍して春泥に委す所、寧ろ日本人の性情とせんや。松柏科植物は然らず、(略)其根を托するの土壤や少量に、四囲の境遇も亦た逆ならんか、仮令其幹をして天を衝かしむる能はざるも、豪氣竟に屈せず、断崖絶壁石面稜層の上と雖も猶ほ且つ根を硬着し、幹や枝や葉や四時克<sup>75)</sup>勁草に抗し、他の生平艶を競ひ媚を呈せる軟弱の植物は枯死し尽くすも、独り堅執して生存し、而して会<sup>76)</sup>と斧を以て斬伐せられんか、些の未練を遺すなくして昂然斃るゝ所、他の花木の企つべきにあらず、真に日本人の性情中の一標準となすに足れり」(九〇―一〇頁)。

志賀は桜に日本人の「性情」を「代表」させる従来型の美意識を否定した上で、松こそを「日本人の性情中の一標準」とする新たな美意識を提案する。ここに見出せるのは、既存の美意識は必要に応じて操作的に修正、加工されねばならないという思想にほかならない。

ではここにとどのような原理が働いているのか。文中の「豪氣」「勁草に抗し」「独り堅執して生存し」「斧を以て斬伐せられんか、些の未練を遺すなくして昂然斃る」という修辭の連鎖に注意したい。これらの記述は、松が戦場での戦士(男性)

の姿に重ねられていることを物語る。そして松の男らしさは、「美亦佳」という女性的な形容が与えられる桜や、「艶を競ひ媚を呈せる」という女らしさを強く帯びた「軟弱の植物」との対比によって強調される。こうした女らしさへの嫌悪、男らしさの優遇、戦闘的精神の称揚こそは、『日本風景論』を強力に規定する構成原理だったと見られる。

そのことは火山という景物への執着からも裏づけられる。

『日本風景論』が火山の美の称賛に注力する際に、「雄」「壮」「豪」という男性的な形容がしつこく現れることに注意したい。例えば駒ヶ岳と恵山えさんという北海道の山は、それぞれ「磊落雄渾」「跌宕壯絶」と評され（六六頁）、鹿児島かごしまの川辺七島の景物を記すくだりでは、「景物豪放」という形容が七度反復される（九四頁）。

こうした男らしさ称揚の方針は、俯瞰の快楽への拘りと密接に結びついている。『日本風景論』は、「山頂の眺望真に雄拔」（六五頁）、「山頂の眺望甚だ壮宏」（七一頁）などのように、山頂からの俯瞰の快楽を繰り返し強調する。つまり俯瞰という視線の運動と、それに伴う山岳一帯の広大な風景への没入と一体化の経験は、「雄」「壮」という字句にふさわしい男性的な感慨を発動させる機会になる。『日本風景論』が俯瞰という視線のあり方に執着するのはそのためなのである。

『日本風景論』において北海道という場所がとりわけ厚遇されねばならなかったのも、男らしさ称揚の方針と関連するはずである。現に『日本風景論』は、先の駒ヶ岳などに留まらず、例えば「楡樹ユヅリ々枝玉を懸け、其間蝦夷松、棋楠キナンなどに留まらず、例道の景色を、「北方豪健の象」という男性的な形容によって称える（三七〜三八頁）。別のところでも日本の文人や画家たちに「北海道に遊はんことを要す」と呼びかけながら、「仮装せず、矯飾せず」という北海道の風物を礼賛する（一八七〜一八八頁）。この「仮装せず、矯飾せず」という形容が、先の松の男性的な姿に通じることは明らかだろう。

では何がこのような男らしさに色濃く染まった美意識の制作を志賀に迫るのか。この美意識と結びついているのが明治期の政治だった。志賀は北海道への訪問を呼びかける先の文脈でこう主張する。

「皇天の此の洵美なる国土を日本民族に賜たま与するや、更に今日より大なるものありき、岡本韋庵をして

余嘗行天下。察其各士之風。如平安。水清山秀。風景極為佳麗。而人心纖嗇。無大國之風。（略）及航北海。覽雄城オホシロ大樽間等山川。則爽然自失。及聞島内諸処。益覺其勝出人意表。（余嘗て天下を行めぐり。其の各士の風を察す。平安の如きは、水清く山秀で、風景極めて佳麗と為す。而れども人心纖

奮とくにして、大國の風無し。(略)北海に航し、雄城むすろ、大樽間おたるま等の山川を覽るに及んで、則ち爽然として自失す。島内の諸処ところを閱するに及び。益ますます其の勝人しょうにんの意表に出づるを覺ゆ(5)。」と紀せしめたる夫の樺太島を失ひたる即ち是れ(一八八頁)。

文中の岡本章庵(一八三九〜一九〇四年)は樺太開拓に努めた探検家、官吏、教育者、漢学者として知られる。これまでの検討を踏まえると、この章庵の言説は『日本風景論』の構成原理の補足説明として浮かび上がってくる。章庵は「平安」つまり京都周辺の風物を、「佳麗」という女性的な形容に結びつけながら貶め、それに対置されるべき魅力的な空間として北海道を位置づける。この言明が、長らく「平安」と強固に結びついてきた日本の美意識の体制への批判としての意味を持つことは論を俟たない。そしてこうした認識の転倒を生み出すのが、日本が「大國之風」を備えねばならないという明治期の政治的要請なのである。

この章庵の認識が、「美亦佳」とされる桜を貶めながら、北海道の男性的な風物の礼賛に努める『日本風景論』の姿勢と補充し合う関係にあることは明らかだろう。そして志賀は先のように章庵の言説を引きながら樺太島という領土の喪失を嘆いた後に、日本の「大國」化への願望を饒舌に語り始める。すなわち台湾や山東半島などの領土が今後日本に加われば、それは画

師や文人たちの「一大祭(さい)」になると述べ、その際に台湾の玉山や山東省の泰山などを、それぞれ「台湾富士」「山東富士」などと改名していこうと提案し、「日本の文人、詞客、画師」たちに、それに応じた「大作傑品」の創作を呼びかける(一八八〜一九〇頁)。このように『日本風景論』において政治的な関心と美的な関心は一体化している。つまり在来の美意識の解体を推し進めながら、男性的で戦闘的精神に満ちた美意識の構築に努める『日本風景論』の叙述を駆動するのが、日本を「大國」化せねばならないという強力な政治的要請なのである。

日本の「大國」化という政治的要請が男らしさの発揚に結びつくことは、明治天皇像の加工過程からも分かる。先学の調査が教えるように、かつて伝統的な服(着物)をまとい、薄化粧を施し、「公卿的女性的」(佐々木克)な形象を残していた明治天皇はしだいに変化し、軍服を着て、ひげを生やした姿で人々の前に現れる<sup>(6)</sup>。つまりこの過程で、一八八二年の軍人勅諭で規定されたように、軍人の最上位に立つにふさわしい、際立った男らしさと戦闘的精神を喚起する属性が明治天皇に加わる。章庵の言う「大國之風」が明治天皇になければならないという配慮がそこに働いていたことは論を俟たない<sup>(7)</sup>。この明治天皇像の形成が、『日本風景論』における先の美意識の形成と軌を一にしていることは明らかだろう。



そして日清戦争は、この再構築された明治天皇と『日本風景

論』が男らしさの発揚のために協働する機会になった。現に広島の本営で軍務に当たった明治天皇は、「堂々として威武を世界に耀かす」という報道に見られるように（無署名「大蘂西進」『東京朝日新聞』一八九四年九月一三日）、際立った男（軍人）らしさを湛えた人物として喧伝された。この状況は例えば徳富蘇峰に次のような高揚感をもたらした。「今上天皇陛下の、<sup>（かんじょう）</sup> 肉食宵衣、軍務に励精し給ふは、四千余万国民の、其の心を躍らせて、感謝する所にあらずや。（略）／（略）四・千・余・万の国民、皆な一・劍・君に酬ゆるの志を振起する、素より宜べならずや」（『征清の真意義』『国民新聞』一八九四年一月七日、無署名）<sup>86</sup>。

このとき『日本風景論』が読者に呼び起こしたのも、これとよく似た、男らしさや戦闘的精神に満たされた感慨だった。「王族既に遼東を略し將に北京に入らんとす豪爽跌宕の民族にあらざれば能はざる所此時此会彼れ此書を撰して世に問ふ本を知ると云ふべし」（長嘯子「日本風景論を読む」『山陽新報』一八九四年一月一三日）<sup>87</sup>。日本の軍人に付される「豪爽跌宕」という男性的な形容がすぐれて『日本風景論』流であることに注意したい。ここからも『日本風景論』が明治天皇像の再構築や日清戦争時の時勢などの政治的文脈と親密な関係を結びなが

ら現れたことが分かる。

以上に見てきたように、『日本風景論』は同時代の日本の政治的要請に応じる形で、戦略的に従来型の美意識の修正を企てる。むろん志賀の思索は、「政治、法律、理化学等、実学と呼做す者」（宮崎湖処子）に満たされた言論界の中で、美や風景という論点を喧伝した点で新しかった。しかし美や風景はあくまで日本の「大国」化という政治的要請に奉仕するべき論点として見出される。さらにそこで示される帝国主義的な発想は、現在においてあまりに鈍感に映るだろう。ただしそうした『日本風景論』の美意識を相対化する作業が、『日本風景論』自体によって促されてもいることにも注意したい。

先述のように『日本風景論』は、美意識（風景の見方）の可変性を繰り返し確認する。さらに美意識は必要に応じて操作的に加工されねばならないという思想がここで打ち出される。言い換えれば、種々の風景を眺める興味とともに、風景の見方や美意識そのものを人為的に加工する興趣が『日本風景論』で鼓吹されている。それゆえ志賀の意図がどうであれ、『日本風景論』は必要に応じて『日本風景論』自体の美意識の加工をも唆していると言える。そしてまさにその作業に率先して取り組んだのが後続の文学青年たちだった。次にこの展開を辿ろう。



#### 4 文学青年たちの風景論

志賀重昂と小島烏水や日本山岳会の影響関係はすでによく知られている。ここでは別の光景に目を向けたい。例えば石橋忍月「霜の美」(『太陽』一八九五年一月)は「水蒸気」という言葉を多用しながら霜の魅力を力説し、坂下愛柳「水蒸気の美」(『少年世界』一八九五年一月一〜一五日)も題名の通り「水蒸気」の魅力を検討する。他にも自然の再吟味の試みとして、林和生「梅の花」(『少年世界』一八九五年二月一五日)、「さびしさの美」の分析を含む布川無識庵「『さびしい』とは何ぞや」(『女学雑誌』一八九五年一月)などがある。

『早稲田文学』の無署名の記事「風景美」(一八九五年二月一〇日)はこれらの記事に触れた際に、「風景美についての論このごろ其処此処に見え初めぬ蓋し志賀矧川の『日本風景論』これが口火となるものゝ如し」と推測した(一五二頁)。このように『日本風景論』は同時代人たちに美や風景という論点を鮮烈に意識化させ、美意識の再吟味を促すきっかけになった。『日本風景論』の反響を別の角度から確認しよう。この本が民友社同人の表現活動に深い影響を与えた点に注意したい。徳富蘆花は『日本風景論』を読み、「何時かは書かうと思ふた「美なる日本」が、先鞭を他に着けられた」と感じたという(『富

士』一卷、福永書店、一九二五年五月、四四八頁)。蘆花「自然と人生」(民友社、一九〇〇年八月)に「水蒸気」という語がさかんに用いられるのは、明らかに『日本風景論』の影響だろう。また宮崎湖処子の紀行文「日光」(『国民新聞』一八九六年八月二〜二九日)にはこう記されている。「(日本)風景論又曰ふ世界の平和は火山湖に由つて代表せらるると、信なる哉、此夕湖水の穏なること処女の如し」(二六日)。ここから『日本風景論』が一人の文学者の観察作法に変更を加えた様子をはっきりと確認できる。

この文脈で国木田独歩の事例を考慮したい。独歩の表現活動は、『日本風景論』以後に活性化する美や風景の再吟味の作業がどのように発展していったかを鮮やかに示す事例として特に注目に値する。

志賀への独歩の関心をうかがわせる形跡は、先の独歩「民友記者徳富猪一郎氏」に留まらない。独歩の日記『欺かざるの記』をはじめから辿ると、一八九三年二月二〇日の記事に突然「水蒸気」という用語が多用される記述が現れる。「凡て此等よりも美なるは元越山の水蒸気なり。木立山の水蒸気なり。或時は全山焰の如く燃へ、或時は一縷の火花谷の陰より立登はり、(略)怪物の如く天宮の如く変幻万状真に美観なり／雨、水蒸気、山岳、光線、白雲、青空、美なる哉これ等の配合融混

の妙や」<sup>10)</sup>。

明らかにこれは志賀『日本風景論』の原形になった「日本風景論」(『亜細亜』一八九三年一月一日、無署名)に影響を受けた記述だろう。なおこの「日本風景論」に見られる、「光線は此の水蒸気の分子を透して来り、(略)蓋し多く水蒸気の変化を目睹せざるを以て然るか」という記述は、先の独歩の記述における「光線」云々や「変幻万状」という言い回しとも対応している。「日本風景論」を載せた『亜細亜』に独歩が親しんでいたことは、『欺かざるの記』の一八九三年の記事から分かる<sup>11)</sup>。当然ながら独歩は『日本風景論』も手にとっていた<sup>12)</sup>。

そして独歩「武蔵野」(『国民之友』一八九八年一月二月、原題「今の武蔵野」と「忘れえぬ人々」(『国民之友』一八九八年四月)は、いくつかの点で『日本風景論』に影響を受けていたと見られる。まず両作品には「水蒸気」という言葉が相変わらず用いられる(四〇頁、二四九頁)<sup>13)</sup>。さらに「忘れえぬ人々」には「円錐形に聳えて高く群峰を抜く九重嶺」という表現が見られる(二五〇頁)。「円錐(形)」という特徴的な形容は、『日本風景論』で山岳の形容句として頻出する言葉でもあり<sup>14)</sup>、独歩が『日本風景論』に倣った可能性は高い。

語彙選択の点に留まらない。「武蔵野」が武蔵野という風景を眺める興味だけでなく、風景の見方つまり美意識を加工す

る興味をも語ることに注目したい。特にその姿勢は、ツルゲーネフ著、二葉亭四迷訳「あいびき」(『国民之友』一八八八年七月六日〜八月三日)が引用される一節によく表れている。まずここで日本人の美意識の限界が指摘される。「元来日本人はこれまで檜の類の落葉林の美を余り知らなかつた様である。林といへば重に松林のみが日本の文学美術の上に認められて居て、歌にも檜林の奥で時雨を聞くといふ様なことは見当らない」。

その上で独歩は「あいびき」の一節を例示し、「自分がかゝる落葉林の趣きを解するに至つたのは此微妙な叙景の筆の力が多い」と述べる(八〜一〇頁)。つまり「檜の類の落葉林の美」を知らない伝統的な日本の美意識と、この植物の美に注意する外国の美意識の双方が並べられた上で、後者の美意識に沿って自己の美意識が修正されたと述べられる。ここから美意識の可変性をはっきりとこの文学青年に自覚されていることが分かる。同様の自覚を示す記述を、小金井での散歩を記した次の部分にも見出せる。「成程小金井は桜の名所、それで夏の盛に其境をのこ／＼歩くも余所目には愚かに見へるだろう、しかし其れは未だ今の武蔵野の夏の日の光を知らぬ人の話である」(二八頁)。独歩はここで小金井という地名と桜を結びつける慣習的な連想の解体を通じて、既存の美意識の無根拠さを浮かび上がらせる。さらに「武蔵野」の第七、八章では、武蔵野の定義を

めぐる友人との応答を通じて特定の風景観が新たな見解によって修正、更新される様子、つまり美意識の書き換えの作業風景そのものが実況中継的に示される。このように複数の美意識のあり方を比較、照合しつつ、人為的に美意識を加工する面白味を前景化するふるまいが、『日本風景論』に重なることは明らかだろう。なお先述のように『日本風景論』が「武蔵野」と同じく、桜という景物の美を自明としてきた美意識の体制に異を唱えたこともここで想起しておこう。

以上のように『日本風景論』は美や風景という論点の前景化を通じて、国木田独歩などの文学青年たちを美意識の再吟味に向かわせるきっかけを作った。ただここで見えてくるのはそれだけではない。独歩たちの作品がある局面で『日本風景論』流の風景論に背こうとしたことに注目したい。

## 5 非政治的な世代の台頭

国木田独歩「武蔵野」では日記の公開や過去の読書体験の回想を通じて武蔵野の風景が吟味される。林原純生「武蔵野」の位相（田中実ほか編『新しい作品論』へ、新しい教材論『へ』1、右文書院、一九九九年二月）はそのことに触れながら『日本風景論』との違いを説く。「無視され忘れられた自然と生

活の発見を無名の個人的な作業として提示することこそ、この期の『日本風景論』に代表される景観学と文学への反措定なのである」（一八〇頁）。本論はこの見解に同意しつつ、さらに両者の違いとその背景を掘り下げたい。

先述のように『日本風景論』は自然の景物の中に戦闘する男の姿を透かし見たり、樺太島、台湾、山東半島をめぐる領土問題を持ち出しながら風景を吟味する。しかし独歩の「武蔵野」「忘れえぬ人々」ではそうしたふるまいは見当らない。そのことは、『日本風景論』が忌み嫌う女らしさこそが独歩の作品で手厚く遇されることと関連するだろう。「忘れえぬ人々」で繰り返し悲哀や涙が描かれることに注意したい。例えば主人公の大津は深夜に独りで灯に向かっている際に、「堪え難いほどの哀情を催ふし」、「我知らず涙が頬をつたう」ほどに感傷的である（二五九頁）。

特にこの傾向を端的に表すのは、「嗚咽する琵琶の音が巷の軒から軒へと漂ふて勇ましげな売声うりこゑや、かしましい鉄砧てつたんの音に雑まざつて（略）流れる」光景の魅力を語る「忘れえぬ人々」の記述だろう（二五六〜二五七頁）。「勇ましげな売声」という男らしい音が、「嗚咽する琵琶の音」という男らしからぬ音によって後景化される瞬間に興味を見出すこの一節は、『日本風景論』の構成原理との違いを端的に示している。

同時代において悲哀は、女らしさや脱政治性と強く結びつくものだった。例えば末広鉄腸『小説雪の中梅』（博文堂、一八八六年八月―十一月）で国野基が「悲哀の情」を催し、涙する場面は「慷慨ノ壮士ニシテ婦女ノ情ヲ起ス」と説明され、政治活動からの脱線として意味づけられる（一一二―一二六頁）。そして独歩の作品は、ここで攻撃される「婦女人情」に満たされた、非政治的な情念への共感を選びとる<sup>15)</sup>。

そうした独歩の表現の非政治的な傾向は、「忘れえぬ人々」で「大連湾頭の青年漁夫」（二五八頁）という外国人までも親愛感の対象になることからも裏づけられる。「人間存在の不思議の念」「人生の問題」「無窮の天」「忘れえぬ人々」二五一頁、二五九頁）などの言葉に見られる、哲学的、宗教的な思索への耽溺ぶりも、同じ傾向の表れと言える。

この文脈で「武蔵野」という平面空間が特に念入りに描くべき風景として、独歩によって選ばとられたことは示唆に富む。独歩がそのことに意識的だったことは次の記述から分かる。「武蔵野では」見下ろす様な眺望は決して出来ない。それは初めからあきらめたがいゝ（「武蔵野」二三頁）。先述のように『日本風景論』は山岳からの俯瞰の快樂と、それに伴う「壮」「雄」という字句で表される男性的な感慨を強調した。「武蔵野」が魅力を見出すのは、この俯瞰の試みが頓挫し、男性的な

感慨が不発に終わる場所なのである。

そうした表現傾向に徳富蘆花の自然描写との共通点がある。独歩と蘆花はともに政治への美意識の動員を拒みながら風景の再吟味に努めた。例えば蘆花『自然と人生』にはこう書かれている。「実に億万年の昔より億万年の後に到るまで、無限のスペースを流れ流れて限りなく流れ行く時の流を想ふのである。あゝ、白帆が見へて来た、……前を過ぎ行く……過ぎ行く……最早見へない。羅馬の所謂大帝国も斯く過ぎてしまつたではないか。（略）亜歴山、那波列翁も、斯の通であつた」（七二頁）。「亜歴山、那波列翁」などの政治的事象は、「億万年」という極大の時間の顕在化を通じて矮小化される。この非政治的な感慨が先の「武蔵野」「忘れえぬ人々」の表現と共闘関係にあることは明らかだろう。

このように志賀の影響下にあった独歩や蘆花たちは、一方で『日本風景論』流の美意識に率先して背こうとする。この展開をどのように理解すればよいのか。一種の世代闘争がそこに介在しているというのが本論の考えである。周知のように明治期の思想の展開は政治熱の衰退史と言うべき様相を呈している。そして志賀や蘇峰（ともに一八六三年生まれ）の世代に比して独歩（一八七一年生まれ）や蘆花（一八六八年生まれ）の世代の頭脳がいっそう非政治的な情念に支配されていることも、こ

の展開と無関係ではありえない。

独歩「我は如何にして小説家となりしか」(『新古文林』一九〇七年一月一日)はその消息をよく教えてくれる。これによると、独歩はかつて政治家を志望していた。しかししだいに「基督教にて示されし宇宙観、人生観などが寝ても覚めても自分を或は悩まし或は慰め」るようになる。この傾向は独歩たちの世代の共通体験だった。「斯ういふ境遇に陥つた青年は当時、自分ばかりでなく、外に幾人もあり」、その青年たちは「宗教家」「語学か倫理の教師」「文章を書くのが本職になつたもの」に落ち着いたと独歩は言う(六九頁)。むろん蘆花や北村透谷や高山樗牛などもその一群の中にいる。

それゆえ独歩たちは蘇峰などの少し上の世代に対して、自分たちの非政治的な精神傾向を擁護するという課題を抱え込まねばならなかった。現に独歩は「牛肉と馬鈴薯」(『小天地』一九〇一年一月)で、「吾とは何ぞや」という問題を軽んじる蘇峰に反駁しつつ<sup>(16)</sup>、自己の思索的傾向を声高に正当化した(二八頁)。むろん一八九三年の人生相渉論争において北村透谷たちが蘇峰と対立したのも、この問題圏の出来事だった。

独歩の作品が著しく女性的で非政治的な情感や「人生の問題」への思索的態度を備えているのはそのためなのである。この文脈で独歩が「我は如何にして小説家となりしか」で自身の

政治熱の低下を次のように説明していることに注意しよう。

「以前は自分と世間とが常に相対して居たのが、今度は自分と此人生、自分と此自然とが相対して来て、自分の心は全たく其方に取られて了りました」(六九頁)。独歩において「自然」は「人生」と同じく、政治とは明確に区別されるべき思索領域として捉えられる。この点に、あくまで「自然」を日本の「大國」化や樺太島、台湾、山東半島などの政治的文脈の中で捉える志賀との違いを確認できる。すなわち独歩たちは、当初濃厚な政治意識を留めていた風景論という営みを、より非政治的な自分たちの世代の気分にあふさわしいように再加工し、所有し直した。ここに蘇峰や志賀たちから遅れて来た後統時代の自己主張を見出せる。

ただし志賀の試みは、たとえ独歩たちの世代に比して濃密な政治意識を留めているにせよ、美や風景という思索領域を広く思想界に喧伝した点で決して独歩や蘆花の試みと違っていたわけではない。さらに独歩たちの試みは、先述のようにあくまで『日本風景論』という独創的な先例があったからこそ促された。その意味で『日本風景論』だけではなく、それに連なる後統世代の新たな風景論も志賀の業績の一部分だったと言わねばならない。以上の検討を通じて、『日本風景論』の出現をきっかけにして風景論つまり美意識の再吟味の営みが本格的に始まり、わ

ずか数年のあいだに独歩「武蔵野」などの注目するべき成果が次々と生み出され、美意識の可変性について慌ただしく理解が深められていった一八九〇年代の動向を確認できたと思われる。

## 6 新思想の移譲

これまで見てきたように、志賀重昂『日本風景論』は風景を眺める興味だけではなく、その眺め方や美意識を加工する興趣を自覚的に追求した点で画期的だった。そして国木田独歩や徳富蘆花は志賀によって示された風景論、つまり美意識の再吟味の企てを受け継ぎつつ、同時により非政治的な自分たちの世代の気分にあさわしいようにその企てを加工し直した。

この展開は、経世家流の知識人が新思想（「風景論」）を、より年少の、そしてより非政治的な知識人に移譲するという経過を辿る。視野を広げると、同型の新思想の移譲の儀式が他にもあったことが見えてくる。

創作界の事例が分かりやすい。周知のように矢野龍溪や東海散士などの政治家は、西洋流の小説の執筆者ないし紹介者として後続の小説家たちに刺激を与えた。また石橋忍月や内田魯庵より以前に、いちはやく西洋流の精緻な文学評論の範を示したのが、一八九〇年から衆議院議員として活躍する高田早苗だっ

た。さらに蘇峰によって始められた人物論という営みは、北村透谷など、より非政治的な知識人たちに受け継がれ、いっそう発展を遂げる<sup>15)</sup>。このように明治期の表現と思想の歴史は、硬派の知識人からより非政治的で年少の知識人への新思想の移譲の儀式によって特徴づけられる。本論が見てきた風景論の動向もこの新思想の開拓事業の一環なのである。

別の角度から言えば、この文脈で行われたのは、独歩が言う「精神的開国」という社会改良への新たな提案だったと理解できる。あらためて独歩「民友記者徳富猪一郎氏」を想起しよう。そこで「政法の整理」に追われた伊藤博文たちの「政治的」な「開国」や、「蒸気済人電気電信」に注力された福沢諭吉たちの「社会的開国」に続き、新島襄や徳富蘇峰による「精神的開国」の時期が来たと主張される（三頁）。言い換えれば、明治期に続けられるのは、当初政治的、社会的な領域で始まる改良という営みを、その外側、つまり内面や価値観といった個人的、精神的な領域に拡大していくための努力だった。そして志賀『日本風景論』は美意識の改良という新たな観点を加えることで、「精神的開国」という企てをより発展させるべく現れたと言える。独歩が蘇峰の「精神的開国」の実践の数々に共感すると同時に、志賀の試みにも魅了されていたことは、その意味で自然な成り行きだった。

- (1) 蘇峰『文学断片』（民友社、一八九四年三月）収録。
- (2) 志賀と後続の書き手との関連の検討は、黒岩健『登山の黎明』（日本山書の会、一九七六年五月）、荒山正彦「明治期における風景の受容」（『人文地理』一九八九年二月）などのように、主に小島烏水や日本山岳会に着目しつつ行われてきた。他方、本論は別の文脈を視野に入れて志賀の地理学関連の著作の意義をあらためて考える。
- (3) 「初版批評 日本風景論」（『日本風景論』再版、一八九四年二月）一四頁、一五頁。
- (4) 志賀と政教社が「美術」を重要な思想的課題として捉えていたことは中野目徹『明治の青年とナショナルリズム』（吉川弘文館、二〇一四年六月）一二六―一二九頁で指摘されている。
- (5) 読み下し文は岩波文庫版『日本風景論』（前掲）三一九頁による。
- (6) 佐々木克「天皇像の形成過程」（飛鳥井雅道編『国民文化の形成』筑摩書房、一九八四年六月）一九〇頁、多木浩二「天皇の肖像」（岩波新書、一九八八年七月）第五章。
- (7) 佐々木「天皇像の形成過程」で、軍人としての天皇像がヨーロッパ諸国の帝王に倣ったものであると指摘されている（二三六頁）。
- (8) 蘇峰『大日本膨脹論』（民友社、一八九四年二月）収録。
- (9) 「初版批評 日本風景論」前掲、一二頁。
- (10) 『国木田独歩全集』六卷（学習研究社、一九六四年九月）三六二―三六三頁。
- (11) 二月二〇日、九月一日（『国木田独歩全集』六卷、三四頁、二五七頁）。
- (12) 独歩「千代田艦の偵察」（『国民新聞』一八九五年一月二四日）。この点は後述の林原純生「武蔵野」の位相（一七五頁）で指摘されている。
- (13) 「武蔵野」「忘れえぬ人々」の引用は独歩『武蔵野』（民友社、一九〇一年三月）による。
- (14) 「円錐形」（三二二頁）、「円錐形」（五七頁）。
- (15) 「（三）日本には火山岩の多々なる事」の章に「円錐体」「円錐状」という形容が頻出する。涙が政治と結びつく事例がないわけではない。東海散士『佳人之奇遇』初編卷二（博文堂、一八八五年一〇月）の会津戦争に関する記述で現れる「涙」（一七丁オ）はその一例である。ここで涙は友と敵を対置する政治的構図の起動に貢献する。他方、先の独歩の作品の涙は明らかに『佳人之奇遇』流の涙とは異質であり、むしろそうした政治的構図の後退に寄与する。
- (16) 『日本近代文学大系10』（角川書店、一九七〇年六月）の山田博光の注釈（四五三頁）。
- (17) 拙論「徳富蘇峰の人物論」（未発表、『日本文学』への掲載が決定している）。
- 付記 本論は上智大学国文学会二〇一八年度夏季大会（七月七日）での発表に基づく。ご意見をお寄せ下さった方々に感謝申し上げます。本論は科学研究費補助金（課題番号17K13300）による成果の一部である。